

## 双子地球通信

入 角 晃太郎

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

**要旨** 双子地球の思考実験によるヒラリー・パトナムの議論では、「私は水が飲みたい」という私の思考の意味は、私の心的内容だけでは決まらず、私の置かれている外部環境をも参照されなければならないとされる。本稿では双子地球という概念装置自体への批判は差し控えるものの、双子地球の思考実験から意味の外在主義を導くパトナムの議論が妥当でないことが示される。というのも、パトナムの双子地球論証はそれ自身地球語で書かれざるをえないにもかかわらず、その点に無自覚であるからだ。本稿は、双子地球を用いた議論からは、意味の外在主義は肯定も否定もされないのだということを論ずる。

キーワード：双子地球

### 序

私が今、頭の中で「水が飲みたい」と考えているのだとしよう。このとき、私が考えていることがどのような意味内容を持つのかは、私自身の心的内容さえわかればよいとするのが、おそらく常識的な見方であろう。しかし、こうした常識的な見方に対して反論を突きつける有力な議論がある。それがヒラリー・パトナムの双子地球論証である。パトナムは、双子地球論証によって、「意味の外在主義」という立場を打ち出す。意味の外在主義とは、「意味は頭の中にはない」をスローガンとする意味理論だ。意味の外在主義によれば、私が頭の中で考える「水」という語の意味は、私の心的状態のみによっては決定されえず、その意味の決定には私を取り巻く外部環境をも参照されなければならない。

意味の外在主義が正しいのだとするならば、その影響は深刻である。なぜなら、私の心的内容だけでは私の考えていることが決定しないのだとす

るならば、内省や内観に頼って推論を進めてゆくという営みが何を意味しているのかが、それ自身だけではわからないということになりかねないからだ。したがって、意味の外在主義は、私の思考の意味内容の確からしさを揺るがしかねないような、きわめて重大な主張なのである。

本稿は、パトナムが展開した双子地球論証が誤っていることを指摘する。むしろ本稿によれば、双子地球という概念をある言語で語ることのうちには、パトナムが言おうとした意味の外在主義とは真逆の主張が最初から含まれているのである。

ただし、本稿は双子地球という概念自体に異議を申し立てたいわけなのではない。双子地球という概念装置を廃品扱いしてしまうことは、それを用いてきた議論の積み重ねを無に帰してしまうことを意味する。本稿が目指すのは、双子地球という概念を廃棄処分することではなく、それを再利用することである。そこで本稿は、双子地球という概念をそれが曖昧性や不整合性を持っているために拒絶されるべきだとする批判者に対して、私たちの言語実践を踏まえて、双子地球という概念

が了解可能でなければならないことを論ずる。そうして守られた双子地球という概念を改めて分析することを通じて、意味の外在主義は少なくとも双子地球という道具立てからは導くことができないということが明らかにされる。

とはいえ、特定の意味理論に肩入れすることが本稿の目的なのではない。本稿によれば、双子地球という概念装置からは、意味の外在主義も意味の内在主義も帰結しない。双子地球を用いてどちらを主張するにせよ、その主張を語る言語が貼りついてくるからだ。本稿の目的は、私たちが意味理論について語るときでさえ、その語りもまた特定の言語によってなされざるをないということをも明らかにすることなのである。

### 1. 「この文は何語で書かれているか」

思考の内容は実在的な事物との関係を必要とするのか、それとも、思考において外界の実在物は関与しないのか。私が今考えている「水を飲みたい」という心的状態は、私の心の外にある実在的な事物によってその意味内容が左右されるようなものなのか、それとも、それ自体として確固たる意味内容を有するのか。こうした問題をめぐって、意味論における外在主義と内在主義という二つの対立する立場がある。心の哲学における外在主義は、志向的状态を「広い」とする学説であり、これに対して、内在主義は、志向的状态を「狭い」とする学説である。志向的状态が広いとは、次のようなことである。

心的状態  $S$  が広いのであれば、 $S$  の存在は  $S$  の対象が現実に存在することを含意する。極端な例を挙げよう。知識が心的状態であるなら、知識は広い心的状態である。たとえば、カエサルがルビコン川を渡ったということを私が知っているなら、カエサルもルビコン川も現実に存在する、といった具合だ。(Crane 2001=2010, p. 40)

私の「水を飲みたい」という心的状態が広いのであれば、私が考える「水」という語彙の意味は、

外界のあの水のこと以外ならず、あの水を離れては、「水を飲みたい」という私の思考は意味をなさない。このように考えるのが意味の外在主義である。

言語というものが社会的に学ばれるものである以上、私の頭の中の意味が外界の実在物との関係によってはじめて決定されるという外在主義の主張には一見突飛な点はないように思われる。しかし外在主義によれば、私が今抱いている「水が飲みたい」という考えですら、外界を参照しなければ意味が定まらないのだということになってしまう。私が今頭の中で考えていることすら、外界の参照なしには意味が決定されないという外在主義のこの帰結は、私の内省による推論を無根拠なものにしてしまわないだろうか。少なくとも、あらゆる心的状態が「広い」のだとするならば、私は自分が今「水が飲みたい」と呟くことで何を意味しているのか、自分に対してさえ確信が持てないということになりかねない。したがって、「水が飲みたい」という私の呟きがそれ自体で確固たる意味を持つことができるためには、ある程度の「狭い」心的状態が確保されなければならない、という意見も十分に説得力を持つだろう。このように、意味の外在主義と内在主義は、どちらも簡単に一蹴できるような立場ではないのである。

意味における外在主義は、ヒラリー・パトナムによる「双子地球の思考実験」によって論証されたとされている。双子地球の思考実験のあらまはこうである。

ここで銀河系のどこかに双子地球とよばれる惑星があると仮定しよう。双子地球はこの地球と生き写しなのである。実際、双子地球上の人人は日本語を話すとする仮定する。事実、この SF でとくに指定する違いを除けば、双子地球はこの地球と厳密に類似していると読者は仮定されてよい。また、もし望まれるならば、読者は双子地球上に自分の分身 (Doppelgänger) —— identical copy —— がいると仮定されてもよい。(Putnam 1975=75, p. 160)

ところが、双子地球には、地球とは異なる特徴が一点だけ存在する。それは、水が  $H_2O$  ではなく、その化学式が非常に長く複雑な、別な液体だという点である。パトナムはこの化学式を、簡単に XYZ と略記する。

地球上でのオスカーが、「水が飲みたい」と言ったとしよう。このとき、双子地球の、オスカーのドッベルゲンガーも、「水が飲みたい」と言っているはずである。このとき、ふたりの脳の物理的状態は同一である<sup>1)</sup>。にもかかわらず、両者の発言は意味内容が異なっている。地球のオスカーの言う「水」が  $H_2O$  を指しているのに対して、双子地球のオスカーの言う「水」は XYZ を指しているからだ。この違いは、両者の心理的状態の差異によるものではない。なぜなら、脳の物理的状態が同一である彼らは、心理的状態についても完全に同一であるからだ。したがって、心理的状態としての語「水」の意味は、それだけではその外延を決定することができない。つまり、「水が飲みたい」という私の心的状態は、たとえ自分の中でどんなに明瞭なものに思えようとも、外界が参照されなくては、それがどのような意味内容を持つのかは未決のままであるのだ。

これが双子地球の思考実験による、意味の外在主義の導出である。この思考実験は発表以来、数々の反論に曝されてきたが<sup>2)</sup>、いずれも決定的な批判であるとは言い難いように思われる。そこで本稿では、双子地球論証がある失態を犯していることを示すことによって、双子地球論証から意味の外在主義へと至る通路をブロックすることにしよう。

パトナムの論証は、次のステップからなると考えられる。

- 1a. 地球語の「水」は  $H_2O$  を指すのに対して、双子地球語の「水」は XYZ を指す
- 2a. 地球人のオスカーの「水が飲みたい」という思考と、双子地球人のオスカーの「水が飲みたい」という思考は異なる
- 3a. 地球人のオスカーと双子地球人のオスカーは心的にも物理的にも完璧なコピーとなっているので、両者の思考の差異は心的な

いし物理的差異に由来するものではない

4a. 語の意味は頭の中にはなく、環境相対的<sup>3)</sup>である（意味の外在主義）

1a において、地球語と双子地球語では「水」という語彙において何を指すかが変わってくるのが前提される。この前提を敷衍することによって、4a である意味の外在主義が導出されるわけだ。

これまでにこの論証に寄せられた批判の多くは、1a を、すなわち議論の前提を棄却する形をとるものであった。例えばエディー・ツェマックは、どこまでを同じ言語共同体と考えるべきかは自明ではないとし、「水」には  $H_2O$  と XYZ の二種類があるのだと考えることも可能であると指摘している<sup>4)</sup>。また、ステファン・シュワルツは、1a は水が  $H_2O$  という本質を持つ自然種であることに依存しており、人工物においては同じことは言えないとする<sup>5)</sup>。意味の外在主義とは語一般の意味のことを指すので、その議論を物理的な本質を持つ自然種であるところの「水」によって代表させるのは不当ではないかというのである。

もっとも、パトナムへの反論には他のバージョンもある。ジョン・R・サールは、ふたりのオスカーの願望の充足条件が異なることは認めつつも、両者の思考はタイプの同一であるとしている。この充足条件のずれは彼らの頭の中の指標的な構成要素によるのだという。各々のオスカーの言う「私」が別々の人物を指すがゆえに、水を飲みたいのは誰なのか、という点が両者のあいだで異なるのだ。だが、ふたりのオスカーが指す対象の違いを説明するために「私」の指標性を持ち出すのは割鶏牛刀ではないだろうか。実際、内在主義を訴えるサールの議論では、1a の設定は使用されるまでもないのだ。サールは次のように書いている。

たまたま同一に生まれついた一卵性双生児——一般に「分子一つにいたるまで同じ」と言われるような一卵性双生児——が、ともに「私はお腹がすいた」という思いを抱いたと仮定する。この双子の頭の中にあるもの

はタイプ同一的ではあるものの、それにもかかわらず二人は異なることを意味していると考えられる。なぜなら、「私」という言葉で、双子 A は A 自身を指し示しているのであり、双子 B は B 自身を指し示しているからだ。(Searle 2004=18, p. 246)

翻って本稿は、パトナムの用意した設定自体は素直に受け取りたいと思う。すなわち、本稿は 1a そのものは一旦は受け入れる。その上で、本稿はこの論証が深刻な自家撞着を引き起こしていることを指摘することにしよう。

4a において、意味の外在主義者は、この論証自身を、自分が見知らない対象まで届く「透明な言語」で記述する道を自らに禁じてしまっている。すなわち、1a から 4a までの各ステップが何語で書かれているかによって、その意味が変わりうるということを 4a は要求しているのである。つまり、これらの各ステップが地球語で書かれているか双子地球語で書かれているかが自覚されなければならない。私たちは地球人であるから、上の論証は地球語で書くより他はない。これもまた 4a の要請である。なぜなら、私が地球にいながら地球語と双子地球語のバイリンガルになれるのだとしたら、私は自分がある惑星に束縛されない思考が可能であることになるからだ。そこで、私はこの論証を地球語で書かざるをえない。だが、1a を地球語で書くということはできない。「XYZ」という対象は地球には実在しないからだ。そして、地球に実在しないものに関する思考を禁じたのは、意味の外在主義者その人 (4a) に他ならないのだ。また、仮に 1a が地球語で書けたとしても、そこで言われる「XYZ」は、地球語内の概念にすぎないということになり、そのとき双子地球語は地球語と対等な言語として対置することができない。この場合、双子地球語は地球語内言語となるからだ。つまり、1a を地球語で書くしかないいま、それは神の視点から記述された形而上学的事実とは主張しえないのだ。以上の議論により、双子地球論証は失敗している。

パトナムの論証が一見うまく行っているように見えたのは、1a を記述する言語自身が、地球語

でも双子地球語でもない第三の透明な言語を装ったことにある。だが、地球人にこうした第三の言語の使用を許すことは、双子地球人にもその言語を使用することを許すことを含意し、その場合、地球と双子地球とは第三の言語という共通語を持つことになる。ところが、まさにこうした共通語のありえなさを示すことが、双子地球論の要諦であったはずだ<sup>6)</sup>。謂わばパトナムの双子地球論証は、「この言語は地球を離れられない」ということを言おうとして、地球と双子地球とをともに見下ろした言語で書かれているのだと言えよう。

このように、パトナムの双子地球論証は失敗に終わっている。それでもう、双子地球という概念装置は廃棄処分すべきなのであろうか。そのような立場もありうるだろうが、本稿においてはその道はとらない。それよりも、双子地球という魅力的な概念を再利用することによって何が言えるのかを以下では考えることにしよう。

繰り返しになるが、双子地球の思考実験からは意味の外在主義は導出されない。しかしこのことは、意味の内主義が正しいことの積極的な理由を与えているわけではない。とはいえ、次のことを主張することは許されるだろう。

S: それ地球語であっても双子地球語であっても、その意味は不変であるような、ある文 X が存在する

この文 S を認めるということは、4a を部分的にであれ否定することである。では、なぜこの主張が成り立たなくてはならないのか。まず、この文 S 自身、それが地球語であっても双子地球語であっても、その意味は不変でなくてはならない。

T: 「それが地球語であっても双子地球語であっても、その意味は不変であるような文」の集合の中には、文 S が含まれている

すなわち、文 S と文 T がともに成り立たねばならない。なぜならば、これらが成り立たなければ、私たちは双子地球の思考実験を開始することすらできないからである。というのも、そもそも

双子地球という概念が成立するということが、今私たちが行っている双子地球の思考実験は、当の双子地球における「双子地球の思考実験」と、意味内容が不変であることを要求するからだ。実際、「双子地球」という、自分の惑星と瓜二つの惑星があるという想定を「地球でしかできないもの」として規定してしまうことは、地球と双子地球とが水の組成以外に関して瓜二つであるというもとの規定に反してしまう。したがって、「双子地球」を措定した段階で、双子地球の側も私たちの星を「双子地球」として措定しているということを描定していたことになるのだ。したがって、「双子地球」という概念装置を私たちが受け入れるのであるならば、私たちは同時に、文 S および文 T も受け入れなければならないのである。そして、S と T をともに認めるということは、次の文を認めるということを含意する。

U: 「水」以外の語のうちのいくつかは、意味が地球語と双子地球語において等しい

文 U は、一見、意味の内在主義を積極的に打ち出しているように見えるが、そうではない。私たちは地球語でしかものを書くことができない、ということをも前提に議論を進めてきた。したがって文 U も地球語で書かれざるをえないのだ。このことを強調して書くなら、文 U は次のようになるだろう。

U': In 地球語 [「水」以外の語のうちのいくつかは、意味が地球語と双子地球語において等しい]

文 U' には「In 地球語」というオペレーターがかかっているのだから、それを解除した、地球語と双子地球語の中の語彙の端的な同一性は文 U' からは出てこない。文 S や文 T についても同様である。宇宙のどこかには私とは異なる言語で私と同じことを考えている知性があるのだろうかと思いを馳せる。そのとき、その相手方もまた、「宇宙のどこかには私とは異なる言語で私と同じことを考えている知性があるのだろうか」と思いを馳せてい

ることだろう、と推察することができる。しかしこのような推論から、端的に私の思考と同一の思考が可能であることを示せたと考えることはばかっている。先ほどから私は、自分の言語で一人二役を演じていたにすぎないからだ。

ところで、双子地球は地球と瓜二つの惑星であったが、一点だけ地球と異なる特徴を持つのであった。それは、水の化学式が XYZ であるという点である。このことに関して、そもそも、水の化学式「だけ」が異なると、他は地球と瓜二つであるような惑星などありうるのか、という批判が想定される。この批判者は、「双子地球」という概念自体が問題含みであるとし、この概念を廃棄処分することを要求するのだ。

果たして、双子地球の、「水の化学式だけが異なっていて、他の点では地球と瓜二つである惑星」という概念規定は、この批判者が言うような問題を抱えているのだろうか。批判者の言う通り、「双子地球」という概念が不用品であるとするならば、パトナムの双子地球論証がナンセンスに陥るのみならず、パトナムの論証の失敗を指摘し、双子地球の思考実験を組み直した本稿の議論までもが無に帰してしまいかねない。双子地球という概念が不整合であるとして打ち捨てられてしまうことは、それに寄りかかったあらゆる議論の蓄積がすべて紙屑と化してしまうことに等しい。そうなることは本稿にとっても痛手である。

そこで私は、以下で「水の化学式だけが地球と異なる」とされる双子地球の概念を擁護することを試みる。ただし、その過程で、「水の化学式だけが地球と異なる」ということが私たち地球人に理解されるためには、それ以外の大抵の語の意味が、地球と双子地球とで一致していることが要請されることを断っておかねばならない。つまり、双子地球という概念自体は守り切ることはできても、それはもはや意味の外在主義を引き出すための道具たりえないのだ。むしろ、双子地球という概念装置は、「宇宙のどこかには私とは異なる言語で私と同じことを考えている知性があるのだろうか」という私の想いに肯定的な答えが残されるように、すなわち、意味の内在主義に僅かばかりの可能性を残すために、本稿において再利用され

ることになるだろう。もちろん、本稿は地球語で書く以外ないので、宇宙のどこかには私とは異なる言語で私と同じことを考えている知性がある可能性はあるのかという私の疑問には、最終的な決着をつけることはできないのであるが。

## 2. 双子地球からのメッセージ

ここからは、「双子地球」の概念分析を通じて、「水」という語彙の意味だけが異なるという規定が何を含意するのかを見てゆこう。パトナムは、先の引用で「読者は双子地球上に自分の分身(Doppelgänger)—— identical copy —— がいると仮定されてもよい」と述べていた。そこで、双子地球についてのこの論文を私が書いているとき、双子地球のほうでも、双子の私もまたこの論文とまったく同一の文字列からなる論文を書いていると言えるだろう。このことは、水の化学式以外は地球とまったく同一であるという双子地球の概念規定からの自然な帰結である<sup>7)</sup>。双子地球を水の化学式以外は地球とまったく同一であるとしながら、かつ、双子の私は私と違ってこの原稿を書いていないとすることはできない。つまり、私がこうして「双子地球通信」と題された論文を地球で書いているとき、双子地球の私もまた、「双子地球通信」という名の論文を執筆しているということになるのだ。

ただし、地球で書かれた「双子地球通信」と、双子地球で書かれた「双子地球通信」とでは、異なる点がひとつだけある。それは、地球で書かれた「双子地球通信」における「水」が $H_2O$ を指しているのに対して、双子地球で書かれた「双子地球通信」における「水」がXYZを指している、という違いである<sup>8)</sup>。もちろん、今書いたこととまったく同じことを、双子地球の私も書いていることだろう。つまりここでは、 $H_2O$ やXYZが、指標詞のように振舞うのである。

さて、今から宇宙に向かって、地球で書かれた「双子地球通信」を電波に乗せて送信することにしよう。数万年後に、それが運よく双子地球の受信アンテナに引っかかったとすれば、そのとき、地球の受信アンテナもまた、双子地球で書かれた

「双子地球通信」と題された論文をキャッチすることだろう。双子地球の受信アンテナが地球からのメッセージを受信するとき、地球の受信アンテナもまた双子地球からの同じメッセージを受信するということは、「双子地球」の「水の化学式以外地球と同一」であるという規定によって保証されるからだ。

数万年の宇宙旅行を経て地球に辿り着いた双子地球からのメッセージには、果たして何が書かれているのか。それはもちろん、数万年前に地球から宇宙に向けて送信した、「双子地球通信」という名の論文とまったく同一のものである。ただ、数万年前に地球から送信した「双子地球通信」が地球語で書かれていたのに対して、こちらは双子地球語で書かれているという違いがある。見かけはそっくりなのに、なぜこのような違いがあるのか。それは、双子地球の私が書いたテキストは、双子地球上に実在する対象とのみ因果的に関係しているのであって、地球の対象とは因果的な関係を持たないからだ。したがって、双子地球からのメッセージで言及されている「パトナム」や「カエサル」といった人物は、地球のパトナムやカエサルではなく、それぞれ双子地球人のパトナム、双子地球人のカエサルを指す。つまり、双子地球からのメッセージに書かれた語は、地球上の対象と因果的に一切関係を持たないような、まっさらなテキストなのだと言えよう。

地球と因果関係を一切持たないようなテキスト、しかも「水」の化学式が地球と異なる星で書かれたテキストは、双子地球語で書かれている。果たしてこれを地球人に読むことができるのだろうか。私は、双子地球語のメッセージが解読不可能であるとするにはできないと考える。双子地球からのメッセージは、確かに地球上のいかなる対象とも因果的な関係を持たないだろう。だが、私たちはここで、双子地球なるものが、そもそも地球語によって作られた概念上の惑星であるということ思い出すべきである。双子地球人のパトナムは地球人のパトナムとはまったくの別人であるとされるが、とはいえ、前者は後者を抜きにしては思考されえないはずであり、逆に後者を經由しさえすれば容易に思考可能な対象である。このことを

認めないならば、そもそも「地球とは因果関係を持たない」とする双子地球というものを想定すること自体ができなくなるはずだ。したがって、双子地球からのメッセージは、その中の語が、いずれも地球上の対象ではなく双子地球上の対象を指しているのだとしても、私たち地球人にも十分に読解可能でなければならない。このことは、私たちがふだん小説を読むという言語実践のなかで当たり前に行っていることである。久保明教はこのように書いている。

そもそも、「現実/虚構」という区分は決して盤石ではない。「この作品はフィクションであり、実在する人物、地名、団体等とはいっさい関係ありません」という常套句が逆説的に示しているのは、現実といっさい無関係なフィクションなどありえない、ということである。小説に登場する「中学生」が現実の中学生と、映画が映し出す「ニュータウン」の風景が現実のニュータウンと、マンガで描かれる「T大学」が現実の東京大学といっさい無関係であれば、私たちは何を見ているのかもわからなくなる。(久保 2018, p. 28)

小説を読むことができる私たちは、双子地球語で書かれたテキストも当然読むことができる。双子地球からのメッセージにある「パトナム」という語の意味は、地球上のパトナムとは別ではあるが、それと無関係であるというわけではないのだ。双子地球語の「パトナム」は、地球上のあのパトナムとは別人であるということが留意されつつも、地球上のあのパトナムを参考にして理解されるのである。

ただし、双子地球語のテキストが読まれる際には、双子地球語では「水」の意味が地球語とは異なることには注意が必要である。そしておそらく、「双子地球」という概念装置に対する批判者にとっては、これこそが容認できない点なのではないかと考えられる。すなわち批判者は、「水」という語の意味だけが異なるテキストなど、不整合なものでしかありえないのではないかと、言うのである。

だが、たとえ双子地球の「水」が現実の水と異なっていようとも、それは小説であるかのように読まれることによって、十分に理解可能である。保坂和志は「能産性」という言葉を使って、このことを説明している。

能産性がない限り小説では「東京」という言葉を書いても硬直するだけだが、能産性を持っていれば小説で「東京」と書かれたらその東京は現実の東京と同一である保証はなくなる。そこで現実の東京との齟齬をあげつらう人は小説と協働する構えができていない。(保坂 2010, p. 13)

小説の中の「東京」は、現実の東京と同一ではない。現実の東京とはいくつかの点で異なるだろうからだ。にもかかわらずそれは十分に了解可能な概念である。作中の「東京」が了解可能な概念であることを保坂は言葉の能産性によって説明しているが、この能産性が働くためには、小説の言葉と現実の言葉が、細かな点では異なっているが、大方は概ね一致していることが要請されるはずだ。そうでなければ、私たちは小説を読むことができなくなるだろう。確かに、小説の中の語の大半は、厳密に言えば現実のその語とは意味が異なるだろう。小説の中の「東京」が現実と異なるならば、小説の中の「東京タワー」や「東京スカイツリー」という語に関しても微妙な差異が生じるかもしれない。しかし、こうした揺れのために小説を読むことはできないとする主張は私たちの言語実践に照らせば明らかに誤りである。「双子地球」という概念に対して、「水の化学式だけが地球と異なる惑星」という概念規定を不整合であるとして攻撃を加えることもまた、私たちの言語の特性に則していないだろう。双子地球は水の化学式が異なるため、「雨」や「酸性」や「雪だるま」といった語彙に関しても、地球とは微妙に異なるだろう。しかし、だからといって、双子地球語が私たちにとってまったく理解できないものだということにはならないのだ。

私たちは双子地球から送信されたテキストを、小説を読むように読むことができる。そして、双

子地球語によって書かれたテキストは、地球語で書かれたテキストと、「水」の意味に関しては異なるとはいえ、それ以外の語彙に関しては、その意味は概ね一致していなければならない。実は、こうした一致がなければ、「双子地球では『水』の意味が地球とは異なる」と言うことすらできないのだ。したがって、双子地球の「水」は地球と意味が異なるという主張(1a)は、逆に大方の語の意味が両惑星で一致していることを主張することなしには不可能なのである。パトナムの双子地球論証において1aを主張した段階で、既に4aとは真逆の主張を含んでいたのだ。

両惑星において「水」の意味が異なるというためには、それ以外の語彙に関してはその意味が概ね一致しているということが要請されるのであった。逆に、そうした要請さえ守られれば、地球とは化学式が異なるとされる「双子地球の水」は十分に了解可能な概念である。「双子地球」という概念を曖昧である、あるいは不整合であるとして撥ねつける批判者は言葉の能産性を無視している。双子地球概念の批判者は「小説は読めない」と主張しているようなものなのだ。これは私たちの言語実践からいって、あまりに禁欲的な主張であるだろう。

本稿の主張は、次のように要約される。

- 1b. In 地球語 [双子地球という概念は保持可能である]
- 2b. In 地球語 [双子地球の定義上、地球語の「水」は $H_2O$ を指すのに対して、双子地球語の「水」はXYZを指す]
- 3b. In 地球語 [2bが言えるためには、他のほとんどの語彙の意味は両惑星で一致している必要がある]
- 4b. In 地球語 [「水」以外の語のうちのほとんどは、意味が地球語と双子地球語において等しい] (U'を強めた主張)

本稿は、双子地球という概念を保持することの正当性を示すことを試みた。しかしそのことは、パトナムが主張したがっていた意味の外在主義を認めることとは別のことである。むしろ4bは、

パトナムが言いたかったこと(4a)とは真逆のことが引き出されるということを物語っている。だが、4bによっては内在主義を積極的に打ち出すことはできない。なぜなら4bはあくまで地球語で書かれているにすぎないからである。私たちは、「地球語と双子地球語は概ね意味が等しい」ということが端的に成り立つと言うことはできない。

結局、私の思考が私の心的内容によって決まるのか否かという初発の問いに関しては、双子地球という概念装置は何らの積極的な解答も与えない。少なくとも、双子地球によっては、意味の外在主義という、それを導くための推論の意味自体に疑問を投げかけるような、自己破壊的な結論が出てくるといえることはないのである。

## おわりに

パトナムが双子地球を用いて示そうとした意味の外在主義とは、私の言葉の意味内容が実在物に左右されるか否かを問題にするものであった。こうした局面においては、私が推論の中で用いている「双子地球」という語それ自体は実在物ではなく地球語による単なる概念にすぎないことは十分に自覚されてしかるべきである。パトナムが双子地球の思考実験から誤って意味の外在主義を導き出してしまったのは、自分が地球語で語っている双子地球という惑星を、地球語で語られているということに束縛されない強度を持っているかのように錯覚したためである。なぜこのような錯覚が起きてしまったのか。それは、地球語と双子地球語における「水」の意味の差異を語ろうとして構築された論証それ自体もまた、この言語、すなわち地球語で書かれざるをえないということをパトナムが忘却してしまっていたからだ。

本稿は、こうした反省を踏まえた上で、双子地球を用いた思考実験を組み直した。その帰結は、意味における外在主義と内在主義の、いずれの立場にも積極的に与するものではなかったが、少なくともパトナムによる意味の外在主義の導出が不適切であったことは示すことができた。

本稿における論証は、「水」以外の語のうちのほとんどは、意味が地球語と双子地球語において

等しいという結論を得た。これは表面上は、「語の意味は環境相対的である」とするパトナムの主張とは真逆である。だが、この論証の結論自体が本稿の述べたいことなのではない。本稿の眼目は、私たちが論証において何を主張するにしろ、それは地球語で書かれざるをえない、ということを経験するに至った点にある。外在主義と内在主義のいずれの立場に立つにしろ、意味の理論はこの経験を手放して論ずるべきではない。本稿の意義は、特定の意味理論への論証を強めることにあるのではなく、これまでの意味の理論における議論それ自体が言語によってなされざるをえないことを指摘したことにあると言えるだろう。

#### 注

- 1) W・G・ライカンは、「人体のかなりの部分は水によってつくられているために、双子地球人は私たちの分子的な複製ではありえない (Lycan 1999=2005, p. 104)」と指摘しつつ、この点は気にしないことにしようとして提案している。ライカンは、この点がどうしても気になる場合には、人体に含まれない自然種に話を変えて読むことを勧めている。
- 2) 主なものに関しては、Pessin&Goldberg (eds.) (1996) および Lau and Deutsch (2016): sect. 3 を参照。
- 3) 「環境相対的」とであるというのは、平たく言えば、「語の意味は外部環境によって変化する」ということである。
- 4) Zemach 1976
- 5) Schwartz 1978
- 6) 双子地球論証は、「因果的に隔絶された対象については言語は語れない」という主張を含んでいた。したがって、地球と双子地球は、(のちに両惑星を行き来するという設定を仮に付け加えるにせよ)「一旦は」因果的に隔絶されたものとして規定されていなければならない。
- 7) 「水の化学式以外は地球とまったく同一」という条件が厳しすぎるのではないかという疑問を持たれるかもしれないが、「双生地球はこの地球と厳密に類似している (Putnam 1975=75, p. 160)」という条件はパトナム自身が課したものであり、

私がここでその設定を勝手に緩めることはできない。

- 8) ここで、地球人の私がXYZという語彙を使用することに違和感を覚えた読者がいるかもしれない。しかし、そもそも私は4aを支持していないので、私がXYZに言及することには何らの矛盾もない。ただし、私が「ペガサス」などの架空の対象の名前を使用できるからといって、それが双子地球人の私の「ペガサス」と同じ言語であるわけではない。実在しない対象の名前であったとしても、地球語と双子地球語の区別は厳然として存在しているのだ

#### 参考文献

- Crane, T. (2001), *Elements of Mind: An Introduction to the Philosophy of Mind*, Oxford University Press. (植原亮 (訳) 『心の哲学』, 勁草書房, 2010年)
- Lau, J. and M. Deutsch. (2016), "Externalism About Mental Content", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2016 Edition), E. N. Zalta (ed.), URL=<https://plato.stanford.edu/archives/win2016/entries/content-externalism/>
- Lycan, W. G. (1999), *Philosophy of Language: A Contemporary Introduction*, Routledge. (荒磯敏文・川口由起子・鈴木生郎・峯島宏次 (訳) 『言語哲学入門から中級まで』, 勁草書房, 2005年)
- Pessin, A & Goldberg, S. (eds.) (1996), *The Twin Earth Chronicles*, M. E. Sharpe
- Putnam, H. (1975), "The meaning of 'meaning'", *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, vol. 7, pp. 131-193 (『「意味」の意味』, 藤川吉美 (編・訳) 『精神と世界に関する方法』, 紀伊国屋書店, pp. 147-247, 1975年)
- Searle, J. R. (2004), *Mind: A Brief Introduction*, Oxford University Press. (山本貴光・吉川浩満 (訳) 『MiND 心の哲学』, ちくま学芸文庫, 2018年)
- Schwartz, Stephen. P. (1978), "Putnam on Artifacts", *The Philosophical Review* LXXXII, 4, pp. 566-74
- Zemach, Eddy. (1976), "Putnam's Theory on the Reference of Substance", *The Journal of Philosophy*, LXXIII, 5, pp. 116-27
- 久保明教 (2018) 『機械カニバリズム 人間なきあとの人類学へ』, 講談社
- 保坂和志 (2010) 『小説の自由』, 中公文庫

## Twin Earth Communication

Kotaro IRIZUMI

Graduate School of Human and Environmental Studies,  
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

**Summary** When I think, “I want to drink water,” how is the meaning of what I thought determined? It is natural to believe that the meaning of what I say is determined only by my mind. However, a strong argument against this theory exists in Hilary Putnam’s Twin-Earth argument. Putnam advocates for “semantic externalism” using this argument. According to semantic externalism, “water” in my mind cannot be determined solely by my mental state; my external environment also determines its meaning. Semantic externalism has several adverse consequences. For example, if one’s mind alone does not determine what one is thinking, one may not know what one is thinking. Thus, semantic externalism is a serious issue.

This study argues that the Twin-Earth argument developed by Putnam is incorrect because the idea of a “twin earth” contains a claim inconsistent with semantic externalism.

However, this does not imply that the Twin-Earth concept itself is inappropriate. In this case any argument that uses it would be invalid. Thus, we explain that the notion of the Twin-Earth is consistent with the practice of reading.

By reworking the Twin-Earth argument, we demonstrate that it cannot be used to derive semantic externalism. However, this study aims not to argue for a particular theory of meaning but rather to point out that any argument for a theory of meaning must be made using language.

Keywords: twin earth